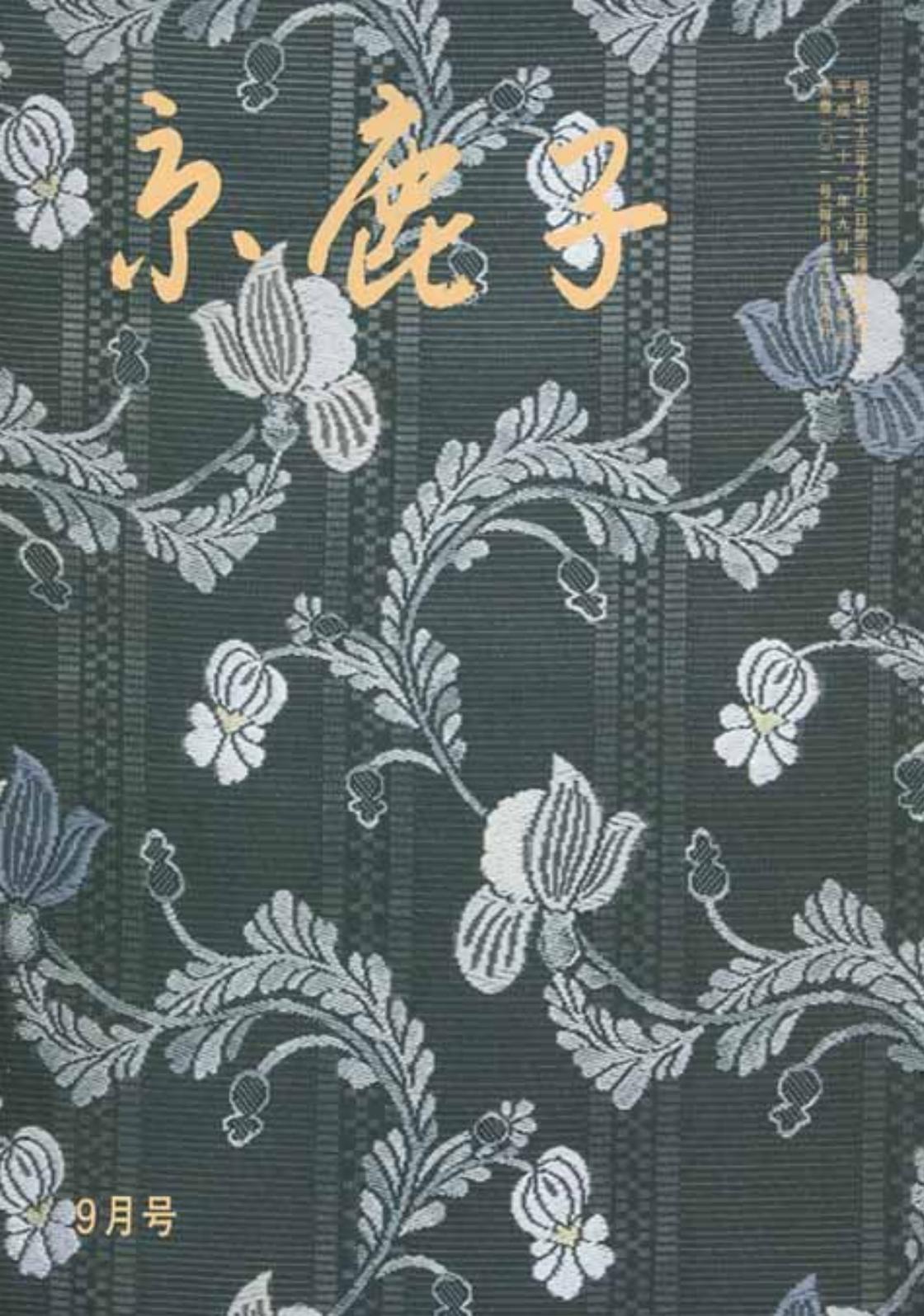


京鹿子



昭和二十一年九月一日創刊
昭和二十一年九月一日創刊
昭和二十一年九月一日創刊

9月号

— 近 詠 —

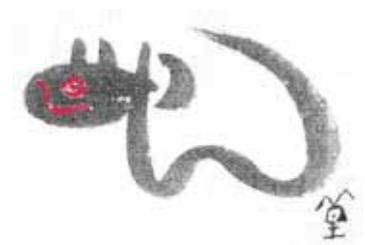
天高し 丸山佳子

豪 農 の 花 桐 仰 ぐ 三 歩 引 き

こ の 館 の 水 よ り 知 ら ぬ 白 紫 陽 花

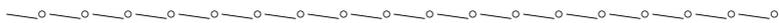
レ ー ス 着 て 胸 三 寸 に 余 る 風

い つ も よ り 老 鶯 美 声 P 奥 で





天	今	A	光	人	こ
高	さ	型	陰	に	の
し	ら	の	の	運	山
富	ら	の	矢	草	の
士	と	亀	の	に	風
と	思	の	先	も	より
名	ふ	頭	に	運	涼
の	入	池	落	や	しい
つ	会	に	つ	秋	こ
く	花	盆	青	が	の
山	八	が	い	立	話
幾	つ	来	柿	つ	
つ	手	て			



豊 田 都 峰

漣響集 その一

夕風の誘ひに川床のともりそむ
川床の灯やまづは比叡の暮れてゆく
夕風のひとすぢのごと川床あかり
里山へしばししるべの半夏生
十葉をふんできつねの祠みち
鉾立ちて高きに囃子あふれけり



古備前や青葉の奥を一座とす
ひとすぢの窯変青葉闇の奥
をさふね一振底光りして青葉陰
蟻に這はれ夢二生家の昼下り
島の灯をいくつ数へて酒さかな
朝風や神置きたまふ島なる座
群島の涼しき海図製作す
土用波ひとつを追つてゐるひとり

秀華採集

なんじやもんじやの花や海馬の切れさうな

奥田 筆子

奇妙な名前の花は細かい白花を靡かせると、なにか視覚が混乱しそうだ。それを「海馬」を持ち出して表現するあたりがうまい。用語も表現の大きな要素である。

寝そびれて言葉の海を泳ぐかな

佐々木 紗知

燕子花咲いてゐるのはかきつばた

高木 晶子

「言葉の海を泳ぐ」は洒落た表現。次々浮かぶ言葉は夜中なればひとしお膨張する。やがて沈んでゆくことだろう。後句の遊び心は楽しい。風に少し揺れてい
るのかもしれない

近 詠

茗荷の花

うちは風遠き日のこと語るすべ
法の山めざす如くに夏つばめ
日盛り風の風一陣の宝もの
刃果つ若きもののふ夏のゆめ
遠回りする勇氣もて夜の秋
つぶやきのひとつが本音夜の秋
てのひらに朝のいろあり茗荷の花

鈴鹿
仁

神麓集



秋 草 故新関一杜

秋草は村里離れ乱れ咲き
ふんはりと大盛りにしてぬかご飯
峠越え夏の蔵王が眞正面
間引菜は老いたる母の朝仕事
みちのくはわがふるさとよ蕎麦の花

八雲 琴 林 日圓

八雲琴奏したあとの釣船草
いざよいの月も水面にゆらめきて
すめらぎも大沢池の月を愛で
一笛に夜叉も見上げる望の月
船上で小督を舞へり秋扇

十 葉 北村 香朗

珍らしき五弁の苞の十葉が
十葉の五弁の苞よ幸くるや
十葉の十字かざして意地を見す
どくだみの花の白さに昏れ泥む
十字型の白を横目に走り梅雨

松 江 和田 照海

神の灯をとりて翅あるものら来る
記紀の里二夕夜がかりに田水張る
神の蚊に食はれ水占えにしかな
竹秋や国引村の天つ神
名城は見えず翡翠の漁れる

仲 間 高木 智

花柘榴稔る姿は児の絵解
花柘榴えんじが夏を深うする
浜木綿のいま天を衝く雨の声
立錐の余地なき庭や半夏生
夕闇の川床より低く二人宛

花ざくろ 藤岡 紫水

戦友の皓齒の記憶花ざくろ
十二神将怒髪を競ふ梅雨の冷え
声で打つ手串一本鰻焼く
優曇華や家風といふも我ひとり
ほろ酔ひに似て散るをせく竹落葉

神麓集



踊子草 松田 都青

幕切れを知らない怖さ踊子草
十字架の形でシヤツ干す聖五月
あの日からみんなが消えた夏木立
晩節や夕風見てゐる崖の上
踊子草飾ればどこかほころびる

卯の花腐し 北川 孝子

五月寒むこの世に生きて生かされて
聞き役をこなすひと日の露に雨
吐く息の染まるばかりに山みどり
立志伝語らずなりし母の日よ
この今を大事に卯の花腐しかな

オゾン層 荻野 千枝

神丘に佇てば螺旋に過ぐ薫風
翠土手身にまとひくるオゾン層
安静の骨身に流れゆく翠
積翠に埋る羅漢の笑みに謎
一と張りの玻璃器の水を干す薄暑

コクリコ 丹生をだまき

田の隅に青の密集余り苗
音も無く間なく時なく竹の散る
バラ苑は色の洪水咽喉渴く
衿正す口で画かれし百合の前
コクリコは風にゆらめき晶子の忌

今日の月 竹貫 示虹

もの言はぬ壺に対ひぬ今日の月
少年が泣く夕焼けへ鉄路伸び
てのひらのひらひら招く風の盆
菱摘みの夕日ぐらぐら盥舟
川沿ひに風の道あり赤とんぼ

入院 柴田 朱美

退屈な梅雨を病魔と闘へり
病窓を一閃よぎる夏つばめ
病棟の隅にうごめく梅雨鴉
五分粥に梅雨の微風を混ぜてをり
病室の魍魎魍魎や梅雨の闇



京鹿子集

豊田都峰選

田螺和へ巻きもどされてゐる時間

京都 奥田 筆子

折紙の途中のやうな揚羽蝶

夕凧やアジアの神の手の多き

なんじやもんじやの花や海馬の切れさうな

はつなつの牛車の軋み橋渡る

寝そびれて言葉の海を泳ぐかな
千葉 佐々木紗知

ピストルの的は君だよジギタリス

イソツブの蟻の話に子が寝落つ

光年の果にわれありみづすまし

過去のこと忘れましたと地虫鳴く

京都 高木 晶子

切り捨ての網目大まか柏餅
蛸蚪生まる時間を溜めて待合室

青梅や安全圏の勝手口

享年の重さそれぞれ藤の房

燕子花咲いてゐるのはかきつばた

新緑の苑の近径登校児
さいたま 神田 惣介

新築に兎の背丈記す子供の日

初夏の風丹田に入れ太極拳

のんびりと草食む牛や雲の峰

風車村カフエテラスの生ビール